

平山 玄 名誉教授

に聞く

思い出の

同志社高商・商学部

聞き手

河野 仁 昭

同志社へ来るまで

——お名前は「しずか」とお読みするんですね。

平山 そうです。

——先生のご出身は鹿児島でございましたねえ。鹿児島市内ですか。

平山 いや、霧島のふもとです。高千穂峰とか韓国岳とかの有名な山があるでしょう。その霧島です。

——じゃ、かなり田舎ですね。

平山 田舎といっても温泉が出ますから。

どこを掘っても湯が出る。だから指宿温泉ほどではないけれども、山の中にしてはけっこう人口もありますよ。

——お家も温泉旅館とか？

平山 父は教員でした。私は明治四十年（五月十八日）生まれで、今年ちょうど八十歳です。だから、日本の封建時代の空気の一部を吸って育ったんです。家が地主だったせいもありましようが、あの時代はかならずしも悪いばかりの時代ではなかった、体験的にそう思いますな。

——中学校は鹿児島ですか。

平山 私は中学校じゃなくて、五年間、鹿

児島商業学校で学んだのです。

——商業が大好きで。

平山 いやいや、大嫌いでした（笑）。読み書きそろばん、みんな嫌いで、習字もこれまた嫌い。私は字が下手やから、下手やと好きになれんですな。そろばんは一年生から五年生までやらされたけど、指が動かんのねえ（笑）。当時は英語が非常に重視されて、だから、英語は徹底的にやらされました。英文の手紙を書かされるとか。

——商業英語でしょうね。

平山 そうそう。同志社へ来てから、教員も足りなくなったり、交通が不便なもんやから講師のきてもないしで、私が簿記とかそろばんまでを教えました。私ほどいろんなもの教えた人は、他におらんでしょうな。

——なんでまた、嫌いな商業学校へ行かれたんですか。

平山 私の父の家系は短命なんですよ。みんな六十歳までに亡くなっている。それでおやじは、自分がいつ死んでも、息子はすぐに職について飯が食えるようにしといてやらにゃいかんと考えたらしいんです。商業学校は実務教育一点張りでしょう、空理空論は一切

なし。

——お父さんは早く亡くなられたんですか。

平山 おやじは比較的長生きで、七十一歳まで生きていました。私とこは母系の方が長命でねえ、この間、最後の伯母が九十四歳で亡くなりました。その前に亡くなった伯母は近所に住んでいて、九十六歳で亡くなりましたが、九十を過ぎたばあさんが、私たちに「県道に自動車かぶえて危ないから、気をつけてなァ」(笑)、「お婆さんこそ気つけや」(笑)。そんな具合でとても元気でした。

——先生は、お母さん方の血をうけつがれたんですね。

平山 でしょうな。

——鹿兒島商業を出られて、それからどこへ？

平山 私は、会社員になって、人の気嫌をとって生きたらんちゅうことが嫌いなんですよ(笑)。

——商業には向きませんねえ(笑)。

平山 そりゃあもう、全然だめで(笑)。商業を出て、神戸高等商業学校へ入りました。それから四年間ほど神戸商業大学にいました

が、働くことも勉強することも嫌いで(笑)、籍だけ置いてぶらぶら遊んでいました。

同志社高等商業学校へ

——同志社高商の教授になられたのは、昭和十八年一月でしたねえ。それまでは、どこに？

平山 鹿兒島高等商業学校で教授をやっていました。

——どうして、同志社へ。

平山 私がきたころは島本英夫先生が校長でしたが(昭和十七年六月就任、「経済原論」を担当していた北野熊喜男教授が和歌山高商へ移って、欠員になっておった。私と北野さんは年代はちがいますが、神戸で同じ丸谷先生からゼミの指導をうけていたんです。それで、北野さんが抜けたあと、先生は後輩の私を推薦して下さったんだと思います。

——こられたころの岩倉は、寂しいところでしたでしょう。

平山 寂しいちゅうようなもんやなかった(笑)。えらいとこへ来た思いましたで(笑)。狐は出るし蛇はいるし。

——戦後でも、少し雨が降ると三宅八幡前

の駅から学校まで、ひどい泥道でしたねえ。

平山 干拓地みたいな所でしたから、学生たちは水溜りでも下駄をはいてじゃぶじゃぶ歩いておったですが、私たち教員にとってゴムの長靴は必需品でした。長靴はいていないことには歩けなかった。

——同志社の先生方は、岩倉には住んでいらっしやらなかつたんですか。

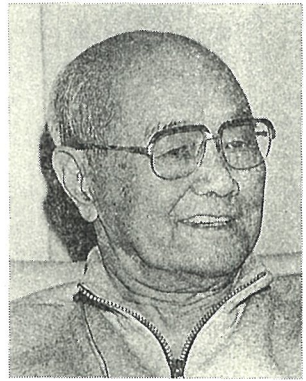
平山 そんなもん、住む気しまへんがな。まさに文化果つる所でした。(笑)

——島本校長は学校のお近くでしたね。

平山 あれは校長社宅ですよ。同志社の関係ではもう一人、女学校の上野いとさんのご主人(上野義一氏)が高商の事務長で、このご夫婦が住んでいました。上野さんは神学部出身でラグビーの選手だったそうですが、私がかきたころはもうだいぶんお年寄りで、ラグビーやっていた人には見えなかった。

とにかく殺風景な所でした。女子学生がいるわけじゃなし。女の人いうたら、学校の前のうどん屋のおばさんぐらいなもので(笑)、娯楽とか楽しみなどというものとは無縁の世界で、男の学生ばかりごろごろしよって。

——生徒は何人ぐらいいいたんですか。戦争



対談中の平山名誉教授

末期だから、もう少なくなっていたでしょ。

平山 いや、それでも千人ちかくはいました。一学年五クラス、一クラス六十人ぐらいでしたから。だから、同志社のドル箱で、高商で稼いだ金を今出川へもっていきよると、先生の中にも教室で言う人がいるわけです。学生の方も年がら年中そんな演説をやって、高商の学生は鼻息が荒かった。

——今出川といっても、中学はよかったですよ。

平山 中学はほとんどんちゅうとこやったでしよう。

高商生気質

——そのせいかどうか、高商の生徒はなに

かにつけ今出川の学生たちとは変わったことをしていたようですね。

平山 そういう面がありましたなァ。同志社へきて最初の始業式に、私がびっくりしたのは、式の前に高商の連中は御所へ下駄をはいて集まるのです。上級生の学友会の委員長のようなのが、そういう指導をするわけです。そして、式が始まると栄光館へやってきて、同志社の校歌を皆が「ワンパーパス同志社」と歌い出すと、高商の連中は下駄で床をトントン踏み鳴らして「かなた比叡の高峰を仰ぎ／校祖の遺訓を 心に占めて／聖別受けたる ちからをみたし——」と大声で「同志社高等商業学校校歌」をやりはじめるんですよ。一年生はびっくりして、きょとんとしてましたがね。

——いっせいに二つの歌をうたったら、全然あわんじやないですか。妨害ですか。

平山 妨害といえはそうですが、彼らのデモンストレーションですよ。まァそういうことを彼らはやりました。

私は同志社へきてすぐに学生主事、いまの学生主任をやらされましたが、わけもわからなときやったし、えらいことでした。

——ゲートル巻いて来んか、というようなことを。

平山 そうそう。ラブレッター書いた学生を引っぱってきて、「退学させるぞ」と脅かしたり(笑)。

——ラブレッターぐらいで。

平山 今やったらなんちゅうことないんですが、当時の同志社高商は質実剛健でなきゃいかんということで、独特の行動基準というものがありましたね。

——同志社大学でも？

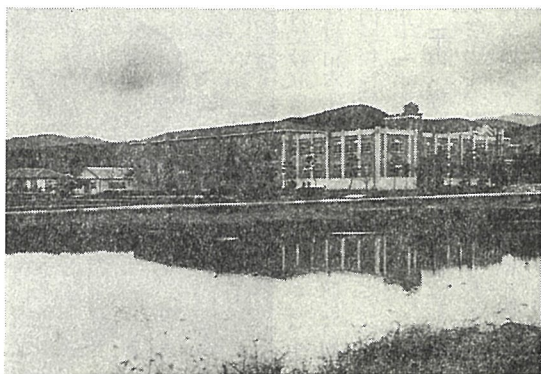
平山 いや、やっぱり高商独特のものでした。そのころの私の常用語は、「君、それでも同志社高商の学生か！」(笑)、こう一喝をくわせる。

——ききめがありましたか。

平山 ありました、ようききました(笑)。今そんなこと言うたら、反対にこっちが怒られそうですけど。(笑)

——京都から進学する学生が多かったんでしよう。

平山 いや、今とおなじで全国から来ていました。当時の高商は、国立は別として、名古屋の高商とか、和歌山高商とか、学校数も



館 徳 樹

少ないし、いい学校が余りなかった。同志社高商はすば抜けていました。だから「天下の同志社高商だ」というわけで、威張っていたわけです。成績もわりあいいいのが入っていました。

——お金持の子が多かったようですが。
 平山 まあそうです。地方の金持の息子とか。なぜか神主の子がかなりおりましたな

ア。現在の学費は高いとよく言われますが、授業料と物価を勘案してみると、当時の授業料の方が高かった。だから、苦学して通学するなどということはできなかったですよ。当時は牛乳配達とか新聞配達などというアルバイトをやっても賃銀は安かったし、とても苦学を続けるというわけにはいきませんでした。だから苦学生はいなかった。

——卒業なさった方は、皆さんそらくなっていますね。
 平山 そうですね。どこの地方にもいるし、ちゃんとやっています。

高等商業学校の開校から廃校まで
 ——ところで、『同志社高商・商学部物語』（昭和五十三年三月）というご本を書くと思われたのは、どうですか。
 平山 それはあの本の「まえがき」にもちよつと書いておきましたが、元高商教授で商学部の教授になっていた先生方が次々に定年を迎えられて、昭和五十三年三月に私が最後の元高商教授として定年退職することになりましたので、退職の記念に思い出などを書いておこうと思ひましてね。

——じゃあ、先生が最も若い高商教授だったわけですね。

平山 そうです。昭和十八年に私が最も若い教授として採用され、それ以後は戦争末期から終戦直後のことですから、教員は一人も採用されなかった。私とほぼ同年輩では、教育学の志賀英雄さんや、中国語の牧治雄さんといった方がいましたが、専門科目を担当していた者では、私が一番若手でした。

——最後の元高商教授として、高商の思い出を記録にとめておこうと……。

平山 そう、そういうことです。

——あのご本の「まえがき」には、「この高商史は、事実を明らかにしようというのではない。これを読む人にとって、客観的事実がどうであったかは、あまり興味が無い」、岩倉ボーイズの間人ドラマを書くんだ、と断わっておられますが、資料にはもちろん当たれたんでしょう。

平山 ご承知のように、資料は十分には残っていない、移転したり商学部に移格したりだね。だからあちこちにいる卒業生を訪ねて、思い出話を録音したりしました。

——高商が誕生しますのは、昭和五年十二



島本英夫校長

月に設立の認可をえていますから、実質的には昭和六年四月ですが、その前に、同志社専門学校高等商業部の時代がございますね。大正十一年四月に開校する。

平山 専門学校令による同志社大学がなくなるので、廃校か元の専門学校にもどすかという時点で、専門学校高商部を発足させたんですが、あれは、将来発展する見込みがあつてつくつたんじゃないと思ひますな。

——そうでしょうね、夜間は教室が空いているし、少しでも収入がえられたらという程度の気持ちで。教員もほとんど法学部の先生方の兼任でしたから。ところが志願者がワツときて、翌年には昼間の学校になつてゐる。

平山 そうそう、それで専用教室の徳照館をつくりました。今の神学館がある所に。

——大正十二年の四月には出来上つていますね。岩倉への移転の動きが始まるのは、昭和になつてからでした。高商部の学友会が募金運動にかけまわつたり。

平山 血書しましたね。血判を押して、その血判状は資料室に残つてゐるでしょう。あれで金を集めたんです。

——どれぐらい集まつたんでしょうか。

平山 四万円。

——昭和四年十一月に、岩倉校地に専用校舎樹徳館が竣工する。高商部はその年の四月に移つていったわけですが、樹徳館はどれぐらの費用で出来たんでしょうか。四万円では駄目でしょう、立派な校舎だつた。

平山 いや、出来たでしょう。私は調べたことがあるんですが、そんなに高いものじゃなかつた。とにかく、あの時代は西村金三郎さんが財政をとりしきつておりましたから。

——西村という人は、なかなかやり手だつたようですね。同志社の理事で、財務部長で、校友会長もやつていた。のちに代議士にもなりますし。

平山 やり手です。しかし、学内では非難も多い人でしたな。

——法学部の先生方の中には、西村さんのやり方に反対の方もおられました。広い土地を買つておいて、高商が使わない分は宅地造成して買却する、それによつて借金を返済するというのは投機じゃないか、学校にあるまじきことじゃないか、というような文面のピラが残つてゐます。

平山 私は晩年の西村さんしか直接には知りませんが、温厚な方という印象が残つてゐます。

——土地買収もあの方が小林正直、津下紋太郎両理事の個人保証で、ご自身の家屋敷を抵当において銀行から長期融資を受けたようですね。

平山 あの人なら、それぐらゐのことはやりますよ。骨格も太かつたし、押しがきく。あれで岩倉の村の人をなだめたり脅したりして、一坪わずか七円五十銭で買いました。

——土地を手放したがつていた村人もかなりいたんじゃないやせんか、余りいい田圃じやなかつたようだし。京都市内へ勤めに行くとかしたほうがいいというわけ。

平山 そういうことはあつたでしょうな。水はけは悪いし、湿地でしてね。どこを掘つ



西村金三郎氏

ても油が浮いたようなどぶ水が出る所で、収穫もあまりよくなかったでしょう。

——そのせいも、宅地にしても買い手がつかなくて、西村さんのおもわくは外れたようですね。

平山 あそこで住もう人はいませんわ。人が住めるような土地じゃなかった。三宅八幡宮の所にちょっと屋敷がある程度でした。

——それから半世紀ほどたった今は、すっかり変わりましたけど。

平山 変わりましたなア、岩倉は。私たちが行っても、昔とは全然気分が違う。昔の校舎などは、どこにあったのやら、それさえわからなかった。

からんですからなア。なつかしいですよ、昔の光景が。

——高等商業学校が経済専門学校と名前を変えるのは、昭和十九年四月でしたわ。

平山 国の命令ですよ、「商業」は具合がわるいというわけで。

——今出川へその経專が移るのは、昭和二十三年でしたか。

平山 いや、二十四年(二月)でした。——新制高等学校と入れ替わりのかたちだったですね。今出川では研究室はどこにあったんですか。

平山 そんなものありませんよ。なんにもなしでした。

——校長室と事務室は彰栄館一階だったようです。島本英夫先生が校長で、事務は渡辺公男さんだった。

同志社大学商学部開設とその後

——昭和二十三年から新しい教育制度が実施される、それともなって旧高商は廃校になるというか、大学に昇格する、そういうことだったわけでしょうが、商学部の開設は

神、文、法、経済より一年遅れて、昭和二十

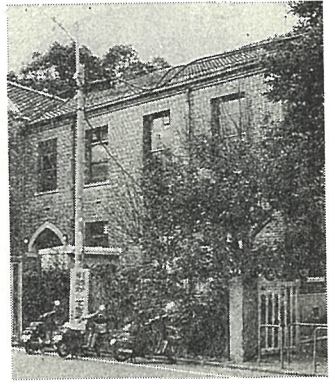
四年四月ですね。

平山 大学設置審議会というのがあったでしょう。当時その審査委員長がたしか一橋大学の高垣寅二郎先生でした。その方は長尾(義三)先生の恩師だったんですよ。ゼミの指導教授だった。その高垣先生が長尾先生に、「あんたとはまアよう整うとる。しかし、あんたこの大学の中の意見が十分まとまったらんようやから、一年間冷却期間をおいて、申請しなおした方がええんとかうか」と、これは表に出た意見とかいきさつではないですけど、そういうアドバイスをされた。「それでは一年延ばしましょう」ということになったわけですね。

——学内に反対意見があったわけですか。

平山 ありました。特に旧制の法学部、いまの法学部と経済学部ですが、その経済学部に反対意見が強かった。経済学部と商学部は置いている学科目もよう似てるでしょう。内容はそう変わらんことをやるわけだから、同じことやるのに二つも学部いらんやないかというわけで——。

——なるほど、経済学部に反対意見があったというのはわからないでもない気がしま



最初の商学部研究室

すが、法学部はなにを理由に？

平山 「商学」みたいなもん学問やないというわけです(笑)。だから学部をつくる必要はないと。だけでも現に、早稲田にしても明治大学にしても、商学部いうたら学内で一番強い学部としてやっつとるでしょうでしよう。けれども反対する人は反対するわけで、意思統一というものはむずかしい。そこへもってきて研究室がないし図書が足りない。

——小林文庫などがあつたでしょう。

平山 そういうものもあるにはあつたけれども、蔵書が足らんということも条件の一つにあげられました。あれやこれやで、島本先生はずいぶん苦心されたわけですよ。文部省

などへ行くこと一つにしても、出張旅費は出るには出たけれども、それだけじゃ足らない。いろんなことで金がいるから、先生は懸命に金策をされた。法律学者が金策するといつても出来るもんじゃないですよ(笑)。なにをされたかというのと、奥さんの着物を売られた。晴れ着を全部——。タンスを空にしてしまったんです。

——奥さんがよく承知しはりましたですね。え。えらいなア。それは初耳です。

平山 山内一豊の妻みたいなものですよ。

そういう話は島本先生が言いふらしたわけじゃないですよ。島本先生は神戸高商の先生をしておられたことがあるし、私と長尾先生は神戸高商で学びましたから、三人集まると神戸高商の同窓会みたいなもので、よくいっしょに飲んだわけです。というてもお二人とも酒は駄目なんです、私一人が飲んでお二人はここにこして座ってほるだけですよ(笑)。そういう席で言われたことです、家内の着物を売って、タンスを空にしてしまつた。とにかく孤軍奮闘されたのです。

——そんなにまでして商学部をつくられて、その直後に、島本先生は法学部へ移って

しまわれるでしょう。

平山 湯浅八郎総長に頼まれたんですなア、商学部をつくるについては全面的に協力する、そのかわり学部が出来たら法学部へ行ってくれんかと。なにしろ商法の先生などというものは得がたいんですよ、弁護士でもやっている方が大学教授の給料などよりずっといい。だから、商法ができて大学で教鞭をとっている人というのは、あれは趣味でやっつとるんやと言われていたくらいでした。法学部でも一生懸命探したんだけど、結局島本先生しか人がなかつた。それで移らざるをえなくなつたわけですよ。

——法学部へ移られたことはともかく、そういう島本先生のご尽力が刺激になつたということはありましたでしょうね、研究室をつくるための募金運動とか。

平山 そうです。研究室をつくること、これは学部設置認可の条件の一つでしたからね。古くから高商におられた先生方は、教え子があちこちにいるでしょう。だからそういう卒業生を戸別訪問して寄付を頼みに行つたり、私なども熱心な卒業生といっしょにあちこち回りました。先生たちも、月給の何分

の一家を出したりしまして、皆ほんとによく頑張りました。それから学生の父兄ですね、父兄の力が大きかったですよ。

——学生たちはどうだったんですか。大学に昇格したらそのまま進学できるわけでしょう。

平山 学生もよくやってくれましたけど、三年生とか、大学には進学しない連中もいましたから、全部が全部ではなかったですね。島本先生もアジ演説をやられましたが、学生を講堂に集めましてね、「商学部を新設するために、君たちも奮起せよ」と。島本先生はだいたいそういうことをしたり、権謀術策をつかう人じゃない。けれども校長自ら学生を扇動するというのもされたですよ。先生の性格からいうて、全然考えられないことだったし、上手やなかったですがね。(笑)

学生も演説をやりました。高商ができることもそうでしたが、ああいうときに演説をやってリーダーになって動いた連中は、卒業してから皆えらくなっています。

——食料難のときだったから、募金運動も大変だったでしょう。学生もそうだけど、先生方も。

平山 おながすいて、皆いやしくなってます、いま思うとお恥ずかしい限りというようなことが多いですよ。

——わかります、私もその時代に大学へ行きましたから。

平山 生き残るということで、皆精一杯でしょう。下手すると栄養失調で死んでしまう。高商に中西(良一)という簿記や商業を教えていた教授がおられました。真面目な先生で、勉強ばかりしているんですよ。あの物がない戦後でも、それで、私いうてあげたんですよ。

「あなた、そんなことしたら飢え死にしますよ。死んだら勉強もくそもないでしょう。人になに言われようと、僕みたいに畑へ行つて芋をつくりなさい。勉強ばかりやっていたら、体が参つてしまつから」

それから二カ月ほどのちに、中西先生は亡くなりました。栄養失調ですわ。英語を教えていた片山(春一)先生などもそうでしたね、顔がむくんできたりしましたね。

——学部昇格とか研究室どころじゃありませんねえ、生き残らんことには。

平山 本当にそうでした。そんな状態の中

で島本先生がずいぶん孤軍奮闘されて。それで皆が協力して。

ひどかった研究室

——涙が出るようなお話ですねえ。研究室ができたのは、昭和二十五年九月ですね、総工費約三二〇万円。寄付は結局、どれくらい集まったんですか。

平山 大体三〇〇万円です。あの当時の条件のもとでは、そりゃ大変なことでした。

——あの建物は、鉄筋は入っていますが煉瓦建築で、あれにくっつけて宗族センターが昭和三十二年五月に増築されますけど、大学の煉瓦建築はあれで終わりですね。あとは鉄筋コンクリート造りになりますから。

ところで、どうしてあんな隅っこへつくられたんですか。

平山 建てる場所についてはいろいろ検討されたようですよ。聚芳館(現・大学図書館の正面玄関あたり)の所へ建てようとか、いまのアームストロング・ハウスの所へ建てようとか、案はいろいろあった。結局クラーク記念館の東側へ落ち着くわけですが、あそこへはもともと神学部の研究室を建てるという

約束ができていたものだから、私たちは結局、明徳館の屋上へ増築した研究室へ移らざるをえないことになってしまいました。

——クラーク記念館（当時は神学館）にも研究室がなかったですからねえ。明徳館の屋上に研究室が増築されたのは、昭和二十九年十月ですから、商学部が移るのはその直後で、結局、最初の研究室には四年ぐらいしかいなかったわけですね。明徳館は条件がずいぶんわるかったとかがついていますよ。

平山 あそこはひどかった。暑いし雨が漏るし。屋根を三べんぐらい仕替えました。そこへもってきて排水路がよう詰るんです。五階でありながら床がよう水浸しになりました。四階はなんともないんですよ。

教員には大体二つのタイプがあつて、研究室で仕事をするタイプと家でやるタイプがある。私は研究室型だから毎日研究室にいました、だからあの研究室のことはよく知っています。雨漏りとか水浸しとか、第一発見者はたいてい私だった。（笑）

沖中（忠一）という化学の先生が商学部におられました。沖中先生が、「建築上からみても五階をつくるのは無理だ、つくるなら

最初からそういう設計をしかんことにはいかんのに、そうなつとらん」と言っておられました。だから問題が起こると、「それみろ」といつてね。

——用があつて夏休みなどに行つてみると、先生方はステテコで出てきましたなア。

平山 ステテコはええ方で、パンツ二丁という人もおつた（笑）。あとからクローラーがついたけど最初は扇風機さえもない。立教大学へ移つた三戸（公）さんなどは、そんなところで真夏に一生懸命やつておるんですわ、三戸さん止めとけ、そんなことしてたら病気になる。私に経験があるから」と私が言うのに、若いから信用しなかつた。ところが九月になつて四十度の原因不明の熱が出た、原因不明やない、夏あんなところで無理するからや、と私いいましたけどね。木地（節郎）さんも一度、おなじようなことでやられたことがありました。

とにかく、あの研究室には参りましたなア。

——至誠館ができるのが昭和四十一年三月ですから、十年余り明徳館におられたことに

なりますね。

大学紛争のことなど

平山 大学教授やからいうて、勉強だけしてたら体が参りますわ。私みたいに碁をやるとか、釣に行くとか、昼寝するとか。

——先生は碁がおつよいときいています。

平山 商学部では「俺が本因坊や」と威張っていました。

——碁はお若いときから？

平山 学生時代からです。夏休みに郷里へ帰つたとき、祖父が医者でしたが、代診を置いていた。その頃は医者の免許状がなくても代診はできたんです。その人と碁をやつた。最初は六目ぐらい置きましたね。ところがいくらやつても勝てんのですわ。「この奴郎」というわけで（笑）。夏休みは暇だから、毎日必死になつてやりましたね、夏休み中に追いつきました。寝ていても碁盤が幻覚みたいに浮かんでくる、向こうがああやつたとき、こっちはこうやつたと、寝ながら全部なぞつて行くわけですわ。

碁とか将棋というものは素質ですなア、素質がないと強くなりません。

——島本英夫先生もやっておられたでしょう。

平山 島本先生は将棋ですわ。力将棋というやつで、定石もくそもない。将棋は私とよくやりました。

——釣はいまでも？

平山 定年になってからはよう行きました。以前は商学部 of 若い先生方を誘って、「商学部フィッシング・クラブ」というのをつくって、「勉強ばっかりしよたらあかん」ちゅうわけで引張って行って、ときどき釣ってきた魚を料理してパーティーをやったこともありました。いまはもう、病氣してから行けなくなりましたが。

なんにしても、勉強ばっかりしておった人は年が寄ってからすることがなくて困るんですよ。そういうこともあるから、趣味というもののもっていた方がよろしいな。

——商学部ができてから、先生のいちばんの思い出に残っていることはなんですか。研究室とか趣味のこともおありですが。

平山 学園紛争です。あのときはもう、大衆を辞めてマージャン屋のおやじでもやろうかと、本気で考えましたよ。(笑)

——商学部もよく団交をなさいましたね。部長が倒れて入院なさったり……。

平山 やりました、今おもうとバカ正直に。実際、なんでこんなことやらんらんのかという気持ちでした。絶望しました。

——大学に？

平山 学生たちに対して。どうして学生たちがこういうことをやるのか、それがつかめなかった。学生たちだけの変化じゃない、社会的バックの変化がもっと大きかったのかも知れません。転換期だったんでしょうな。

とにかく、われわれが考えている大学のイメージと、現実の大学は全然ちがう。いまの若い人が考えている大学、学生が考えている大学、父兄が考えている大学、みなちがうでしょう。私たちが考えている大学というのは、いわゆる象牙の塔ですから、学問をしておればいい、それが第一義だと。ところが学生たちはそんなことを考えていない。もしいたとしたら、授業の妨害したり器物をこわしたりするはずがない。

——いくら話しあっても、だからかみ合わなかったわけですね。

平山 かみ合いません。あれやったら、

学生の方もいらだつはずですよ。それに対して大学の方が十分な対応ができたらいいんですが、そんな対応はとでもできません。

——あの紛争のせいというよりは、おそらく日本の社会全体がそういう時期にきていたんでしようが、それ以後、学生を含めて若者たちがずいぶん変わってきましたね。

平山 社会的な思想的な、そして政治的な変化ですな。もう私たちがイメージする大学じゃないですよ、完全に違うものになってしまった。

新制大学に切り変わったとき、あのときは大きな地殻変動のようなものでした。それからまた大きく変わりました。むかし、私には学生を一喝のもとに黙らせる文句があったんですよ、それは「君、そんなことして大学生のプライドが許すか」と大声を張り上げる。

それでピシャリと黙らせたものです。昭和三十年ごろまではその一喝のききめがありました。それからだんだんききめがなくなりました。(笑)。いまの学生にそんなこと言ったって、「何で怒ってるんや」というようなもんでしよう。こっちの切り札がなくなってしまう。授業中にさわいでいるので、議義がわか

らへんから静かにしろ」と言ったって、聞いたかてわからへん」(笑)、そう逆襲されますわ。

——若い先生方もおなじお気持ちでしょうか。

平山 いや、若い人たちは戦後育ちですから、私たちの世代とは違うし、今の大学に適應してやっていきますよ。大学はこういうものだと思っっていますから。よかれあしかれ時代が変わってきた、大学もそれにとまなつて変ってきたということです。

——どうも長時間、興味ぶかいお話をおき

としました。

時危思 偉人

巻頭

新島襄の色紙の影本を頒布

同志社の創立者新島襄の書簡・色紙などの遺墨に日常接する機会は少なく、せめて複製された色紙でも欲しいとのご要望にに応じて、色紙の影本を、三点作成頒布するこ

かせ下さって、ありがとうございました。くれぐれも健康で、大いに趣味を楽しませようように祈っています。

(一九八七年十二月十四日、平山名誉教授宅で収録)

事していた卒業生広津友信におくられた詩。

(C)「送歳休悲病灑身 鷄鳴早已報佳辰

劣才縦乏済民策 尚抱壯図迎此春」

明治三年一月一日大磯百足屋で春を迎えて詠まれた。

◎ 購入ご希望の方は左記へ、直接電話または文書でお申し込み下さい。

◎ 代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから、後日ご送金下さい。

同志社収益事業課

京都市上京区今出川通烏丸東入る

電話(〇七五)二五一一三〇三七・八

◎ 色紙(影本)
一葉 一〇〇〇円(送料一七〇円)

(A)「時危思偉人」

明治二年一月徳富蘇峰の依頼に応じて揮毫されたもの。

(B)「不止月下併能越 豈涉八州是我分

壯図却促男兒淚 滴々跋為縷々文」

明治二年二月二十八日新潟伝道に従